



至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長

荒谷 卓

先日、スイス・ジュネーブにある世界最大規模の素粒子物理学の研究所である欧州原子核研究機構(CERN)を訪問し、国際部長等職員の人たちと懇談し、最新の原子核物理学の立場からの宇宙創造の原理についてお話を聞いた。その中で、「宇宙は物質ではなくエネルギーによって創造された」という理論を実証しようとしていることを知らされ、大変興味を持った。

面白いことに、戦前の神道家今泉定助氏による古事記の天地創造の解釈もまた、この最先端の科学が予想する宇宙の創造と同じ原理のことを言っている。古事記の冒頭「天地(あめつち)の初発(はじめ)」に成れる神は、「天之御主神(あめのみなかぬしのかみ)」、「高御産靈神(たかみむすびのかみ)」、「神産靈神(かみむすびのかみ)」とある。

古事記の天地創造では、靈(エネルギー)が集中する中心ができると、エネルギーの凝縮と拡張によって「産靈(むすひ)」の活動がはじまり、次々と万有(物質)万象(エネルギー)が生まれ成ってきたと解釈しているのだ。そして、この活動が今も連綿と続き天壤無窮に続くというの、日本民族の宇宙観であり、思想・哲学の根源である。

欧州原子核研究機構の科学者たちも、「エネルギーの強烈なる凝縮と衝動で宇宙が創造された」という日本の神話の天地創造には極めて興味深意ということだった。

宇宙創元のエネルギーの神に「産靈(むすひ)」という呼び名を使っているのが重要なところだ。ここで言う「産靈(むすひ)」とは、エネルギーが何かを産む(生成する)働きと捉えられる。

例えば、人間が子供を産むという行為も、宇宙の創造の原理に基づく、天地創造の延長線上にある営みと捉えて、「産靈(むすひ)」と

呼んだ。男女が契りを「むすぶ」の語源である。生命エネルギーである靈が肉体(物質)をもって生まれるので、「産靈(むすひ)」が「産子(むすこ)」または「産女(むすめ)」に成る。靈を授かった男子を「靈子(ひこ)」、女子を「靈女(ひめ)」と呼ぶのもこうした考えによる。

また、日本の場合、お腹の中に靈を授かった時点から、エネルギー生命体としての年齢を数えるので、出産の時点では「歳」として呼ぶ。現代では「物質」として母の肉体から「分離」した時点を零歳と数えているが、母のお腹に靈を授かった時を零歳と数える伝統的な日本の考えの方が、人を単なる物質ではなく宇宙創元のエネルギーを継承する靈的存在としてみているということである。

日本人は、生れた時に授かった元々の力強いエネルギーのことを「元氣」と呼ぶ。そして「元氣」が持続している限り、人は成長を成し続けると考

将来に希望が持てない日本

武道が単なる戦闘の技術を教える格闘技と異なるのは、こうした思想が根本にあるからだと言える。相手を殺傷し破壊するだけの戦いであれば、社会全体が荒廃してしまう。

平和時における創造、戦いにおける創造という性質を探求していくのが武道の本質であり、日本人が戦いの中に「むすび」という言葉を使った所以である。

言葉を変えれば、平時においても戦時においても「和する」「すなわち敵さえ包容同化し一体となり、共生する道を理想とするのだ。

その根源には、宇宙は前述の通り一体として生まれたのであるから、本来は全体が一体的な継続した活動であるという考えがある。宇宙が創造された時から現代を経て未来までの全体を一体的に捉えるならば、今を生きる我々も宇宙の創造を継続するために生きる存在であるということを知るであろう。

えられてきた。逆に言えば、元気が枯れてしまうということは、エネルギーが枯れることを意味し、人の成長は止まり、「気枯れ」すなわち「穢(けが)れ」ることになり、本来の創造活動が停止された状態になると考えられた。

このように神道では、次から次へと新たに生み成す創造活動をよしとし、逆に、創造をしない状態は「禍(まが)つく」とか「穢(けが)れ」、創造を妨害する行為は「罪・咎」として忌み嫌うのである。

だから、宇宙に生まれ、宇宙に生き、宇宙に(物質としての肉体が)死ぬ人間にとって、「産靈(むすひ)」という言葉は、宇宙本来の活動の一端を担い、新たな創造をつくりだすポジティブなものであり、男女が結ばれて子供を作ること、大変めでたいことなのだ。物質としての肉体は滅びるが、その間に、子供だけではなく、社会に新たな靈(エネルギー)を生み出し、自らも靈に帰る「生こそ本分を尽くしたといえる。

共助的な社会の実現を目指せ

庄により解体されてきた。社会が壊れてしまえば、エネルギーの蓄積場所は個人しかない。しかも、エネルギーはお金だけに評価換算され、金持ちは莫大な力を得る。それを持ち合わせていない人は困窮し、誰からの助けも得られず、孤独死するか、「禍(まが)つき」「穢(けが)れ」「罪や咎」を犯す。

最近発表された先進国の若者の未来に対する希望のアンケートによると、日本人は最下位に近いほどの方だった。日本は「将来に対する希望が持てない国」という結果が出たのである。

これは若い人たちが、現代の競争による自己実現の社会では希望が持てない、と考えていることを意味しているのではない。震災後に多くの若者たちが被災者の支援やボランティア活動にやりがいを見出したように、多くの日本の若者たちは、競争社会よりはむしろ共助的な社会を望んでいるのではないかと推測できる。

戦いが創造を生む武道の発想

武道において剣と剣を斬り合わせることを、「斬りむすび」と呼んでいることにも、この考え方が表れている。

この発想は、「斬り殺す」、つまり相手を斬つて捨ててしまえばいいという考えとは正反対のものだと言える。「斬りむすび」とは、相手の矛や太刀をむすび止め、双方のすさまじいエネルギーを、殺傷と破壊ではなく創造に向かわせしめようという行為だ。

相手と生死をかけた戦いの先にさえ、何らかの創造を生み出していくべきだ、という思想がある。

天象や地象にも和荒があるように、人と人の関係においても、親睦と紛争は避けがたい面がある。

であれば、人間の行為の結果に過ぎない平和や戦争という現象の好き嫌いを論じるのではなく、やむなく戦ったとしても、共和の道を探ろうとすることの方が重要なのだ。

里山資本主義などが話題を呼んでいるが、伝統的な共助社会が壊れてしまった現在、このような新たな共助体を作る動きは注目に値する。政府や行政機構に依存しない、「新たな共助の家の再生」である。

共生する社会にエネルギーが充実すれば、その社会に住む人々は幸福感を覚え、色々な創造活動を展開する。それによって、社会はさらに発展し、次なる創造のエネルギーが生まれる。

社会の基盤となるエネルギーは、共助的なシステム、すなわち「他者の役に立っている」自分分は社会で必要とされている」という自覚を持てる社会でこそ生まれるものである。

こう考えていけば、社会を再生するための最も重大な原理は、いかにして「新たな共助の家」を再構築するかということになるだろう。現在は、公的機関が担っていた事

業を民間企業に移譲することを進めているが、これは、中央行政の監督権は保留しながら、収益権を市場に分権しているわけで、市場での収益に預かることのできない一般国民は、無権者すなわち現代の奴隷状態に陥る。

そもそも、中央集権が進みすぎると、地方行政まで画的になる。さらに、国民一人ひとりの政治行政に対する自己責任感を鈍らせ、公権力への依存心を助長させ、ある

いは不平不満の念を強くする。また、中央の政争が地方や家庭の中間まで入り込み、共助体は分断され相争うようになる。これは、伝統的日本社会の崩壊につながる。

共助社会とは、政府や、地方行政の権限を思い切つて国民にゆだねることだ。国民が主体的に、福祉、教育、防犯防災、保険防疫等末端の自治行政機能を遂行する仕組みである。ここに法的権能を与えれば、無駄なお金も、無駄な公的

機関も、利益主義の民間企業も不必要になる。なにより、国民が心をひとつにして社会を運営し、自助努力で安心安全を獲得できる。

個別の空虚な議論より、われわれ日本人は、どのような社会を創ろうとしているのか、世界はどうあるべきなのかをしっかりと見据えるべきだ。

日本は神武建国以来、お互いに共助し合い、創造と成長を促す家のような社会の実現を目指してきた。その精神を継承する今上陛下

は、常に、国民が心をひとつにして、ともに助け合い、未来を創る社会を国民に呼びかけている。天皇陛下の大御心に副い奉るのが日本の真性保守である。日本のあらゆる政策はその方向に焦点を当てるべきであろう。

世界にも共助的な社会を目指す運動が広がっている。今こそ日本人は、伝統的共助社会の理念を人類普遍のエトスとして、国内外に広める時である。

